

これまでの対話に関する勉強会の総まとめ 作成者：想田 瑞恵

2010年7月6日（火）

「自分の気持ちが傷つかないように対話をしたい」と思ったのが、一連の勉強会の始まりであった。気持ちとは、私が私であることの根拠であり、価値であると考え、そうした気持ち（感受性）を個性と呼んだ。対話は、そうした感受性の違いを大切にしているのだから、それは、個性を大事にしているということである。ならば、回復できないものである気持ちを傷つけないようにするのは当然ではないか。そこで、個性を承認されるような対話を傷つかないように行いたい、と考えたのだ。しかし実際の対話は、傷つくことばかりで苦しい、そういう思いがあった。

そして、6月16日（水）に一回目の勉強会が行われ、私の勘違いが明らかになった。すなわち、個性や承認を求めるような対話は対話ではなく、一種の取引であった、ということだ。取引とは、つまり、「みんなが特別であるという意味での対等性を認めなさい」と要求して、「私が特別だと承認してくれる限りにおいて、あなたにあるあなたにしかわからない特別さを承認しましょう」と言うのである。個性や承認（肯定）を得るための取引としての対話なのだから、自分が否定されること・傷つけられることは、この目的に反しており、受け入れられず苦しいのも当然なのだ。そもそも対話とは、自分のことよりもその場の話題に興味があり、それについて理解しようとするためのものである。その過程で、承認や、他者との違い、それを個性と呼ぶならそういうものが出てくるだけのことなのだ。最初から個性や承認を求めているは、それらは得られない。

以上のような説明には納得した。しかし、納得したくない気持ちもあった。こんなにも個性や承認を求めている私に、それらが得られないとはどういうわけなのか。その問いが、6月23日（水）の勉強会につながった。ここでは、問いに対する答えが得られた。つまり、私は結局自分中心の世界で良いと思っているのではないか、ということだ。自分のみが在る世界に目を向けても、そこには感受性しかない。そこでそれを個性として、自分であることの価値としたのだ。その価値が傷つかないように必死で守りつつ、価値を保つために他者に承認してもらおうとする。しかし、結局、自分のみに価値があると考えており、他者は承認のための道具となっているため、物に承認されても満足のいく承認とはならない、ということだ。一方対話においては、他者もきちんとした価値ある存在である。普遍的な真実・正しさを信じてそれを目指そうとしているからだ。ゆえに、自分の気持ちが傷つくこと・否定されることは単なる損ではなく、むしろ、理解に近づいた証として歓迎されることなのである。

この勉強会を通して、私は、なぜ自分に対話ができないのかがわかった気がした。普遍的なものや目指すべき正しさを信じていないと思っていた。私は、触発された気持ちが全てであると思っている。ならば、私とは単なる機械・物である。そう思いたくないから、価値を自分に見出そうとして、個性にすがろうとしていたようだ。しかし、結局、個性の

基盤が気持ちであるなら、プログラム通りに動く機械と変わりはないのだ（7/5 勉強会流れ参照）。一方、対話においては、人は機械ではなく、かけがえのない人格である。対話をしている人・普遍的なものを信じている人も、たまたまその人の経験からそう思うようになっただけのはずなのに、そういう差はとてつもないように思えた。「自分の気持ちが傷つくこと・否定されることが単なる損ではない」と思える傾向性を持った人が、うらやましくて仕方がなかった。

この不公平感が、7月5日（月）の勉強会の原動力である。ここで明らかになったことは、自分そのものに価値があるとか特別だということは、ありえないということだ。感受性の違い（人と違う特別さ）があっても対話するのではなく、理性の行使・対話の果てに、暫定的なものとして、感受性の違いは見出される。そもそも感受性自体には、生物学的に見ても、特別さどころか差異すらない。与えられた条件の違いがあるだけなのだ。ここに到って、気持ちを自分の特別さ・価値の根拠とする考えは、完全に否定された。では、対話における価値とは何であるのか。

感情は触発されて起こるものなので、それを克服するには、感情とは違うものを想定する必要があるかもしれない。対話して相手のことを理解すれば、相手への不快さは消えることがある。相手を理解しようとするとき・自分を理解して欲しいと思うとき、私たちは理性を想定している。ただ感情に基づいただけの主張は、単なる反射であるから、機械である主張者に価値などない。しかし、理性を使って相手と対話するとき、その理性は自由な主体の証なので、理性の行使者は尊重に値する。つまり、理性を持った者として承認されるのだ。私は、承認された上で、「特別に思われたい」という前提の下、その特別さを「承認」してもらおうとしていた。今の社会がたまたま賞賛するような資質と、理性の行使者（人間）としての価値を、一緒にしていたようだ。そして、そうさせる言葉が個性だったのかもしれない。

自己愛の下、自分だけに都合のいいことを求め語るのは、誠実ではない。しかし、自己愛を消し去ることもまた、誠実ではない。そう考えると、やはり、正しさとは存在しないもののように思う。ただし、「正しさとはありえないものだ」という考えとも違う。正しさとは、私の考えの内にも、誰の考えの内にもあるようなものではなく、ただそれを求めようとする行為のみが正しさなのだ。ゆえに、どんな意図からであっても（人類愛であれ自分かわいさであれ）「人に石を投げつけるのはよくない」と思うだけでは正しくない。同様に、「時と場合と気分によっては、石を人に投げつけてもよい」と思うのも正しくない。正しさとは、それを求めようとして対話する行為において、現れるものであるからだ。